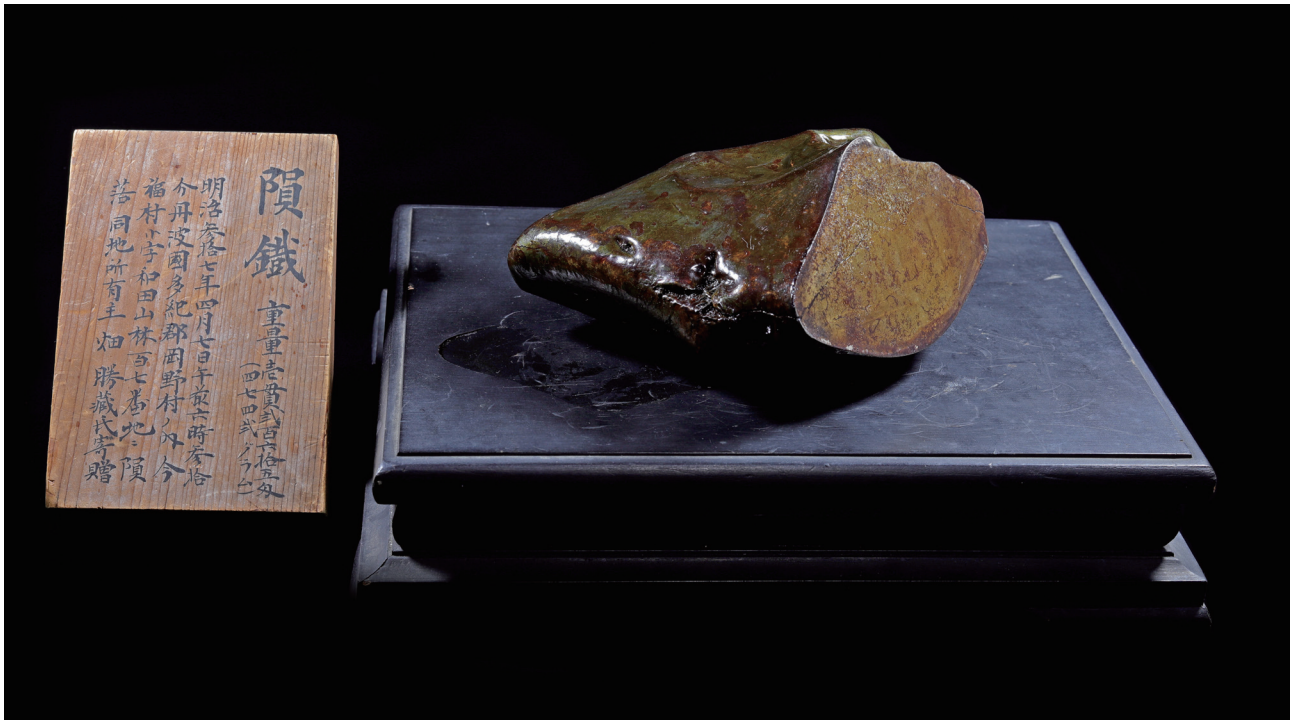
THE KYOTO UNIVERSITY MUSEUM

March 2022

Newsletter No. 54

京都大学総合博物館
ニュースレター



岡野隕石（4～5ページに関連記事）

2021年度特別展「文化財発掘 VIII　埋もれた古道を探る」..... 2
ロビー展示「大地は語る 2021」..... 3
25年目の常設展リニューアル 3
総合博物館コレクション研究〈14〉比企鉱物標本（1）..... 4
研究資源アーカイブ通信〈24〉アーカイブズと私（4）：田路貴浩先生に聞く 6
総合博物館日誌（2021年11月～2022年2月）..... 8

2021年度特別展　文化財発掘 VIII
埋もれた古道を探る

開催期間：2022年3月16日（水）～5月15日（日）

人々やモノの往来にとって道は欠かすことのできない存在である。都が築かれた京の地には条坊制にもとづく都市区画がなされ，東西南北，碁盤の目のように区切られた道路（大路・小路）が作られた。この都と周辺の地域との出入り口となったのが京の七口である。この七口の一つに荒神口がある。ここからは白川，山中を越えて近江坂本へと通じていた交通路が伸びていた。白川道である。志賀越道などとも呼ばれる白川道は幕末以降，尾張藩邸ならびに第三高等中学校（現・京都大学吉田キャンパス本部構内）の設置により，一部が寸断されて今に至っているが，長年にわたる発掘調査によって，キャンパスの地下には，平安時代後期～江戸時代までの白川道が良好に残っていることが明らかになってきた。

シリーズ「文化財発掘」の8回目となる今回は，この白川道に光をあてた展示を企画した。展示は大きく二つの柱で構成している。最初の柱が，吉田キャンパスにおける発掘調査の成果にもとづく，白川道やその周辺の土地利用の変遷である。白川道を遺構として明確に確認できるようになるのは12世紀代である。12世紀後葉から13世紀にかけて道周辺で溝や井戸などの遺構や遺物が多数みつかるようになり，道の需要とともに周辺の地の開発が進んだことが判明する。中世の白川道は崖面を削って平坦面を造作しており，路面を構成する路盤は粗い砂を主体に礫を混ぜた厚さ10 cm前後の固くしまった層からなる。道の両側には側溝のような水の流れが確認できるが，不定形で整備されていた様子はうかがえない。これに対して，江戸時代の白川道は，幾重にも積み重なった轍の跡が残っていることが特徴的で，道の南側には水路が伴っている。中世の白川道には轍の跡はほとんど認められないので，江戸時代になって，白川道が京と近江を結んで車輌の行き交う物流の大動脈としての役割を果たすことになったと考えることができる。

中世の白川道（本部構内，時計台北側，2001年調査）

轍跡が幾重にも重なる近世の白川道断面（本部構内，2001年調査）

二つ目の柱が，白川道が描かれている江戸時代の絵図類や明治時代になって学校建設時に作成された測量図などから，白川道とその周辺の様相をみるというもの。本館所蔵の「山城國吉田村古図」は，18世紀後葉～19世紀初頭に成立したとされる村絵図である。田畑が一筆ごとに記載され，道路のほかに，水路や畦・畦道・土手・笹原などが彩色されて描かれる。村の北東から南西の鴨川（荒神口）へと白川道がはしっており，その両側には短冊状の田畑が広がっていた様子を見て取ることができる。白川道は幕末の動乱期に，尾張藩邸によってその一部が寸断されてしまうが，その後の様子は，1887年，第三高等中学校（1894年，第三高等学校へと改組）の京都移転による学校建設に伴って作成された敷地の測量図からうかがうことができる。

絵図や測量図に描かれた白川道と発掘調査による実像をこの機会にじっくり観覧いただき，白川道に対する知見を深めていただければと願っている。

（文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター
准教授　千葉豊）

ロビー展示
大地は語る 2021 Go to Time Travel ～地球から宇宙まで～

開催日：2021 年 11 月 14 日（日）

「大地は語る 2021 Go to Time Travel ～地球から宇宙まで～」が，関西文化の日に開催されました。本イベントは，地質学鉱物学教室の大学院生有志が中心となって研究内容を紹介するものです。前年度は新型コロナウイルスの影響により中止となってしまいましたが，本年度は感染対策を行った上で，対面で開催できました。

「旅」のコンセプトに基づき，各研究室のブースを回るスタンプラリーを行いました。一部のブースでは美しい鉱物標本や花崗岩，福徳岡ノ場を起源とする軽石，動物の骨の標本などを見ることができました。また，地震・液状化のおこる仕組みが体感できるおもちゃや，化石のスケッチ，電子顕微鏡の疑似体験など，実際に手を動かしてもらう参加型のブースもありました。スタンプを集めた方にはお土産として鉱物や地学にまつわる絵葉書のプレゼントを用意し，たいへん好評でした。例年の大学院生や教員による講演は中止しましたが，その代わりに研究についてのインタビュー動画を作成し上映しました。

当日は，未就学児から大人まで幅広い年齢層の方が参加してくださいました。スタッフの大学院生が来館者に展示内容を説明したり，参加者から質問を受けたりと双方向のコミュニケーションができました。

大地は語る　展示と来場者の様子

感染対策による入館制限があったため，例年より参加者は少なかったのですが，一人一人とお話をすることができ，落ち着いた雰囲気の中，じっくり楽しんでいただけたと思います。大学院生の立場で一般の方に研究内容を伝えられる機会は少ないため，勉強になることが多くとても貴重な体験となりました。開催にあたりお世話になった方々と，参加していただいた方々に感謝いたします。

（理学研究科地質学鉱物学教室 修士課程　善本夏実）

25年目の常設展リニューアル

京都大学創立 125 周年を迎える 2022 年に，京都大学総合博物館も創立 25 年の節目を迎える。このタイミングで常設の展示やパネルを刷新する機会を得たので，その概略について紹介する。まず来館者を最初に出迎えるロビーにはデジタルサイネージ（8 ページ写真）を設置し，展示全体のダイジェストを紹介することとなった。

地震コーナーでは，開館以後に発生した大きな地震についてパネルで触れられていなかったこともあり，最新の知見とともにパネル情報を更新した。とくに，「震災」として記憶する市民理解と，「地震」として分析する科学者理解とを対比させることで，自然史コーナー全体を理解する上で大切な自然科学的視点の啓蒙に努めた。人気の鉱物，動物や昆虫コーナーでは，新たな標本資料を展示したり，最新の研究成果を盛り込んだパネル情報を更新したり，大きな展示替えとした。文化史コーナーについては，多言語キャプションや屋外展示資料のキャプションなど，解説テキストについて重点的に更新した。

大学博物館という館種の特徴からも，最新の研究成果によって展示内容が上書きされていくことは望ましいことであるが，展示担当としては限られた予算とのバランスも無視できず悩ましい課題である。

リニューアルされた地震コーナー

老朽化していた壁紙やアンモナイトのハンズオン展示台など，細部に渡りリニューアルを施しているため，展示室の隅々までぜひご覧いただきたい。

（総合博物館 准教授　塩瀬隆之）

総合博物館コレクション研究〈14〉

比企鉱物標本（1）岡野隕石と隕石コレクション

京都大学総合博物館には三高標本，工学部標本（比企鉱物標本），農学部標本からなる2万点を超える鉱物・鉱石コレクションが所蔵されている。明治期以降に蒐集されたこれらの標本は，質・量ともに素晴らしく，大きな災害や戦火を免れたため保存状態が極めて良い。ほぼ全ての標本に付随する手書きのラベルから標本蒐集に携わった当時の研究者たちの姿や蒐集の背景を窺い知ることができるため，日本の鉱物学・鉱床学の歴史を知る上でも大変貴重なコレクションである。これらの標本は2000年に総合博物館に移管されるまで十分な標本整理や台帳の作成が行われていなかったが，近年本格的に整理・背景調査が進められている。2017年には三高標本を整理した『第三高等学校鉱物標本目録』[*1]が，2019年には工学部標本の一部をまとめた『比企鉱物標本　第一部　元素鉱物･硫化鉱物･ハロゲン化鉱物･酸化鉱物』[*2]がそれぞれ刊行され，現在その全貌が明らかになりつつある。本稿以降では，前回の三高標本[*3]に引き続き，工学部標本について紹介していく。

工学部標本は総数1万点を超える総合博物館の最大の鉱物コレクションであり，日本三大鉱物標本と評される和田標本・若林標本・高標本にも引けを取らない国内最高峰の鉱物コレクションの一つである。標本の多くは，京都大学工学部の前身に当たる京都帝国大学工科大学の採鉱冶金学科で鉱床学を担当していた比企忠（ひきただす）が，教育用の標本室を設置するために日本中・世界中から収集したものを起源としている。我々は比企の教育への熱意と功績を讃えるために，当コレクションを「比企鉱物標本」と呼ぶこととしている。このコレクションは，明治以降の日本の発展を支えてきた150以上の鉱山が最盛期に産出した鉱物・鉱石標本を網羅している。これほどの鉱山の網羅性は他の大学博物館の鉱物コレクションには例がなく，二度と入手不可能なこれらの標本は研究・教育資料として後世に伝えていかなければならない。コレクション全体の概要やより詳細な歴史については『知の宝 II 比企鉱物標本』[*4]を参照していただくとして，本稿では比企標本の中でも異彩を放つ隕石コレクションについて紹介する。

京都大学総合博物館には，現在14点の隕石標本が登録されており，13点が比企鉱物標本として引き継がれてきたものである（残りの1つは2013年にロシアに落下したChelyabinsk（チェリャビンスク）隕石）。現在，隕石学会のデータベースに登録されている隕石の総数は7万個を超えているため，コレクションの規模としては大変小規模である。しかし，日本国内で発見された隕石53点（2021年12月現在）のうちの4点（本物3点＋レプリカ1点）が所蔵されており，極めて貴重なコレクションと言える（図1）。その中でも，岡野隕石（表紙写真）は当館の隕石コレクションを紹介する上で欠かせない標本である。

隕石は構成する物質の量比から，ほぼ全てが鉄ニッケル合金の「鉄隕石」（図2），同量程度の鉄とケイ酸塩（石）を含む「石鉄隕石」，鉄の量が約20%に満たない「石質隕石」の3つに大別されている。岡野隕石はほぼ全てが鉄ニッケル合金であり鉄隕石に分類される。また，隕石には，過去に落下したものを後から発見する「発見隕石（finds）」と，落下（火球）が目撃されて回収された「落下隕石（falls）」という分類が存在する。落下隕石は直ちに回収されることが多いため，発見隕石に比べて地球上での風化が少ない。また，落下時の軌道が記録されて

図1：岐阜隕石

図2：サクラメントマウンテンズ隕石

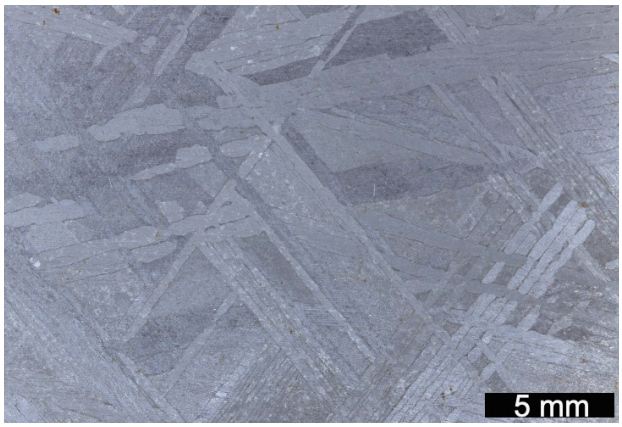


図 3：ウィドマンシュテッテン構造

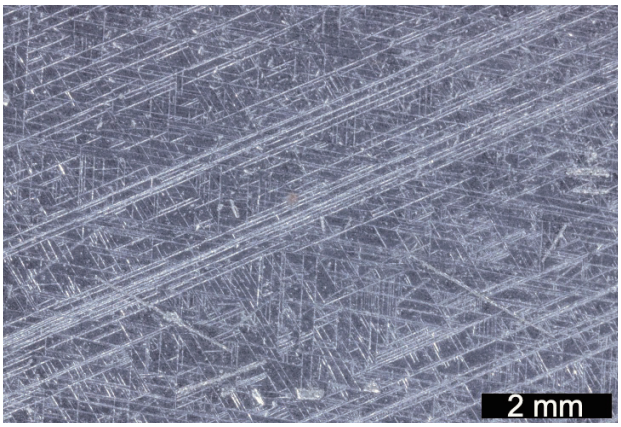


図 4：ノイマン線

いる場合，宇宙空間での周回軌道も予測可能であり，発見隕石よりも多くの情報を得ることができる。2020 年に日本の 53 番目の隕石として登録された習志野隕石も，落下軌道から隕石落下地点の予測や周回軌道の計算が行われていた。しかし，現在見つかっている隕石はほとんどが南極や砂漠で回収された発見隕石であり，落下隕石は約 1300 個程度と隕石全体の 2% 未満である。岡野隕石は落下の日時（1904 年 4 月 7 日 6 時 35 分）が詳細に記録されているため落下隕石に分類されている。落下隕石に分類される鉄隕石というのは今の所 49 個しか存在せず，貴重な標本であることが窺える。

岡野隕石は後述するように，鉄隕石の中でもさらに珍しい特徴を持っている。多くの鉄隕石は，天体内部で溶融した「コア」を起源とし，1000 万年程度の長い時間をかけて非常にゆっくりと冷却，固化した説が有力である。固化した鉄ニッケル合金が 1 万年に 1 ～ 100℃程度の冷却速度でゆっくりと冷えていくと，約 800℃以下でニッケルに富む鉄の「テーナイト」とニッケルに乏しい鉄の「カマサイト」という 2 種類の鉄に分離する。この時，2 種類の鉄が特定の結晶方位に沿って成長することで，「ウィドマンシュテッテン構造」と呼ばれる特異な構造を形成する（図 3）。そのような構造を持つ鉄隕石はオクタヘドライトと呼ばれ，多くの鉄隕石がこのサブグループに分類される。ニッケル量が多い（Ni: >15.8 wt%）場合，2 種の鉄への分離が始まる温度が約 600℃以下と低くなり，明瞭な構造が形成されない。そのようなニッケルに富む鉄隕石はアタキサイトと呼ばれている。ニッケル量が少ない（Ni: <5.8 wt%）場合も，カマサイトが低温まで安定で鉄の分離が起こらないためウィドマンシュテッテン構造は形成されない。ニッケルに乏しいそのような隕石はヘキサヘドライトと呼ばれる。隕石中のカマサイトは天体同士の衝突による衝撃圧縮を経験すると，双晶組織によるノイマン線と呼ばれる構造を持つ（図 4）。ヘキサヘドライトはカマサイトの粒子サイズが大きいためこのノイマン線が顕著に観察される。岡野隕石は当時の比企らの分析でノイマン線を持つヘキサヘドライトであることが判明しており，その珍しさゆえに海外の博物館から標本交換の申し出が多数寄せられていた。当館の隕石コレクションのうちの 5 点は，当時岡野隕石切片との交換で入手した海外の隕石であり，交換に出された切片は現在，ハーバード大学（383g）やロンドン自然史博物館（302g），アメリカ自然史博物館（205g），スミソニアン博物館（17g）といった著名な博物館に収蔵されている。

地球外物質の研究はアポロ 11 号による「月の石」の回収や，「アエンデ隕石」と「マーチソン隕石」という炭素質隕石の飛来，日本の観測隊による南極での多数の隕石の発見，といったイベントが重なった 1969 年頃から世界中で盛んに行われるようになった。現在京都大学では，地表や成層圏に存在する 1 mm以下のサイズの「宇宙塵」や，Hayabusa・Hayabusa2 による小惑星のリターンサンプルなどを対象とした研究も行われており，世界の地球外物質研究をリードする拠点の一つとなっている。1904 年に研究された岡野隕石は，そんな京都大学の地球外物質研究の原点ともいえる貴重な歴史的標本である。

（総合博物館 助教　竹之内惇志）

＊ 1―豊遙秋，下林典正，高谷真樹，石橋隆，白勢洋平（2017）京都大学総合博物館収蔵資料目録 第 2 号『第三高等学校鉱物標本目録』

＊ 2―白勢洋平，下林典正，高谷真樹，豊遙秋（2019）京都大学総合博物館収蔵資料目録 第 5 号『比企鉱物標本　第一部　元素鉱物・硫化鉱物・ハロゲン化鉱物・酸化鉱物』

＊ 3―白勢洋平（2018）総合博物館コレクション研究〈4〉「第三高等学校鉱物標本―松島鉦四郎と地質鉱物学教育―」京都大学総合博物館ニュースレター No. 44

＊ 4―白勢洋平，下林典正，高谷真樹，石橋隆，豊遙秋（2019）地の宝 II 比企鉱物標本，京都大学総合博物館

研究資源アーカイブ通信〈24〉
アーカイブズと私(4):田路貴浩先生に聞く
「増田友也建築設計関係資料 , 1938–1984 (主年代 1950–1981)」

研究資源アーカイブは，京都大学の教員で建築家でもあった増田友也が残した資料の整理を 2017 年より続けてきました。本資料は，2021 年の「増田友也の建築世界」展を経て，「増田友也建築設計関係資料」として公開間近です。整理事業の代表者を務めた田路貴浩先生に経緯や見どころを伺いました。（聞き手：総合博物館 特定助教　齋藤歩）

資料解説 1：京大会館計画案（1964-1968）

――京大会館計画案の見どころを教えてください。

田路　この計画は，京都大学の創立 70 周年記念事業の一環でした。西部構内一帯の再開発を目指し，複合施設として京大会館が計画されたのです。増田友也は 1960 年に渡仏していて，その時に研究室宛に送った葉書に「70 周年記念事業は，僕のモニュメントにする」というようなことを書いています。実際に図面が残っているのは 1964 年以降の作成ですが，それ以前から設計の話はあったのでしょう。最初の計画案は，通路を軸に諸施設が結合したユニット型建築でした。この案をもとに募金が集められ，その後しばらく間をおいて，1966 年春頃から設計が再開されています。

これはその頃に描かれた断面図です［写真 1］。地面からすっと伸びた空間の上部には大型のアーチが浮いているように見えますね。鳥が翼を広げたような形です。先日，増田研 OB の岡﨑甚幸先生にインタビューしたのですが，増田は大きく両腕を広げてこの形を表現し，「こんな感じ。こんな感じ」と踊りながら指示を出していたそうです。

1966 年の 12 月頃には，集中的にスタディーがなされ，翌年 3 月頃には計画案がほぼ固まります。しかし，予算の問題や学生運動の影響もあり，大規模な開発は見送られ，北側の体育館建設と，西部講堂付近の建て替えは切り離されることになりました。その結果，体育館のみを先に建設することになったのです。

1950 年代の増田友也の建築は工学部校舎のような柱梁構造の建物が主流でしたが，1960 年代から HP シェル構造が使われるようになります。1961 年の鳥羽下水処理場では，京大の坂静雄先生が考えた HP シェルを 4 枚合わせた形，つまり構造によって決定された形をそのまま採用していましたが，京大会館の頃になると，「構造で形を決めてしまっていいのか」と言い出します。建築家がつくるもっと造形的な形があるのではないかと考え始めたのです。そこで「構造的現実と表現的真実」という文章を執筆します [*1]。先ほどのアーチのような形は構造的合理性だけでは生まれてきません。造形とは単なる形のことでなく，光による見え方をも含んだものであり，そこが増田の興味のポイントだったようです。

――確かに模型による光のスタディーが多いですよね。

田路　これは音楽堂の光のスタディーです［写真 2］。図面と写真とを突き合わせて見ると，何をスタディーしていたかがとてもよくわかりますね。

資料解説 2：京都大学総合体育館（1972）

――計画が縮小された体育館の見どころを教えてください。

田路　京大体育館の初期案は 2 つあって，私たちは山型案と十字柱案と呼んでいます。増田は十字柱案で建てるつもりだったようですね。かなり力が入っていて，多くの図面が残っています。1968 年の年末には十字柱案が一応完成し，図面には「これで行こう」という増田のコメントが書き込まれています。

しかし，この案もひっくり返されます。放物線の屋根

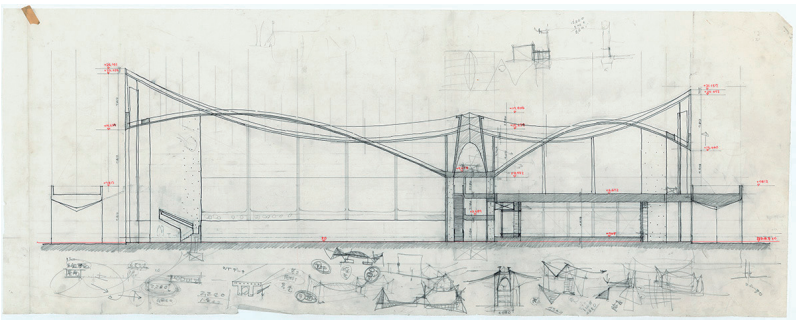


写真 1：「京大会館計画案」断面図（第 2 期案）
資料情報：［断面図］, Ar MIXED 2017/2/S3/01/029/196

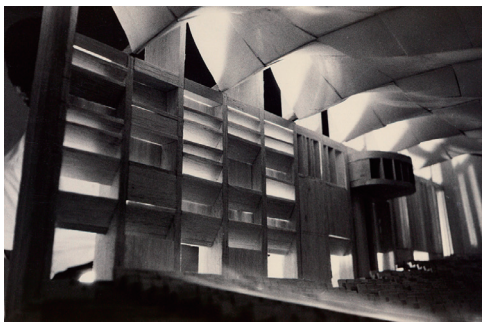


写真 2：「京大会館計画案」模型写真
資料情報：［京大会館（MECKIII）音楽堂 壁面・天井バルサ模型］, Ar MIXED 2017/2/S3/05/006

がなくなり，ルーバー案に変わります。変更には相当なショックがあったと思われますが，詳しいことは会議資料などを見ても出てこないので，変更の経緯はまだわかっていません。

資料解説 3：鳴門市文化会館（1982）

――遺作と言われる鳴門市文化会館はいかがでしょうか。

田路　市役所，図書館，福祉会館，結婚式場といった施設が並ぶ鳴門市福祉会館計画（1972）があるのですが，その辺りが計画の始まりのようです。

――1972 年は京大体育館が竣工した頃ですね。

田路　京大体育館は，当初，工場で製作するプレキャスト・コンクリートの縦ルーバーで計画されていましたが，実施案では工事費の減額を理由に現場打ちコンクリートに変更され，その際にあみだ型ルーバーになりました。これより 1 年前に完成した豊岡市民会館（1971）では，会議棟のエントランスホールに縦ルーバーが実現しています。吹き抜けのルーバー越しに光が入ってくる空間で，これを大規模に展開したのが鳴門市文化会館だとも言えます。

――光の扱いは，立面図からわかるのでしょうか。

田路　そうですね。平面図だけではわかりにくいです。だから模型が重要です。内部をスタディーするためにバルサ材の模型などもつくられています。豊岡市民会館では 1 面だけだったルーバーが，鳴門市文化会館では 3 面に拡張されています。増田の頭のなかでは，おそらくルーバーによって包み込まれた光の空間が思い描かれていたのでしょう。

――光のスタディーという意味では，京大会館計画案，京都大学総合体育館からずっと続いているのですね。

田路　増田は光について時々語っていて，なかでも厳島神社の万灯会についての記述は印象的です。船や神社の回廊を照らしたかがり火が，瀬戸内の海面に反射して海を真っ赤に染め，火の海のように見えるというようなことが書かれています。

　また，博士論文ではアルンタ族の儀礼空間について書かれています。大地に浅い溝を切って両側に薪の山をつくり，夜になり火をつける。すると，ぶわっと燃え上がる。そういう光景を増田はさも行って見てきたかのように書いています（笑）。光がつくる時空間の現象が，頭のなかにありありと浮かんでいたのでしょう。

公開後の利用可能性

――資料公開後の利用のアイデアはありますか。

田路　多くの研究者にぜひ研究に使ってもらいたいですね。増田の建築論の現代的発展について考察するのに使

田路貴浩先生　撮影：岩倉正司（情報環境機構）

えると思います。しかし，ちょっと興味があるという程度の層から，研究に使いたいといった層まで，多様な利用者が想定されるので，公開の仕方についても考えていかないといけませんね。オリジナル資料をどこまで見せるのか，利用者制限を設けるのか。そういう意味で，デジタルデータで公開することは，保存の観点からも非常に望ましいと思います。とはいえ，まだまだデジタル化されていない資料もたくさんあるのですが。

――現時点では，半数もデジタル化できていません。もっとも，アーキビストの中心的な仕事は目録をつくって資料へのアクセスを確保することのほうですが。

田路　いま建築学専攻内で議論しているのは，閲覧希望者にデジタル化の実費を負担してもらうことで，徐々にデジタル化を進めていくという方法です。閲覧希望者には，複写資料を提供することになります。

――20 世紀に日本で活躍した建築家の資料をどう残していくかは，日本全体の大きな課題です。アーカイブズとしての包括的な資料整理は，日本では国立近現代建築資料館や教育機関で試みられていますが，まだ始まったばかりで，その公開も新しい試みとなります。保存や公開について，ほかに何かお考えはありますか。

田路　建物の保存問題は現在進行形で起きていて，増田建築もずいぶんと失われています。残念ながら，今後もどんどん失われていくでしょう。一口に建築保存と言っても，建築の本質を理解しないままに補強などで改変してしまっては意味がないわけで，増田建築の全体像をきちんと把握したうえでの改修工事が必要になってきます。そのため，今回のアーカイブズは大事な基礎資料になると思います。

［2021 年 12 月 6 日，総合博物館（映像ステーション）にて］

（工学研究科建築学専攻 教授　田路貴浩）

＊1 ――「構造的現実と表現的真実――中世的伝統の理解のために」（『NATIONAL DESIGN』1967）；『増田友也著作集』第一巻（ナカニシヤ出版，1999）再録

＊2 ――資料の写真は，以下を参照しました。
「増田友也建築設計関係資料 , 1938–1984（主年代 1950–1981）」，
URL: https://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/archives/1666/

＊3 ――インタビューの全文は，後日，京都大学研究資源アーカイブのウェブサイトにて完全版として公開予定です。
URL: https://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/

総合博物館日誌（2021 年 11 月～ 2022 年 2 月）

展示

▶ 2021 年度企画展「増田友也の建築世界――アーカイブズにみる思索の軌跡」
2021 年 10 月 27 日（水）～ 12 月 12 日（日）
［関連イベント］
＊ Zoom ウェビナーによるオンライン開催
・資料解説 02「淡路から鳴門へ」 11 月 6 日（土）
話者：
市川秀和（福井工業大学）「増田友也の生涯」
水上　優（兵庫県立大学）「瀬戸内の庁舎」
門間　光（京都大学）「地域計画と風景」
杉山真魚（岐阜大学）「鳴門の教育施設群」
朽木順綱（大阪工業大学）「鳴門市文化会館」
ナビゲーター：田路貴浩（京都大学／本展実行委員長）

・資料解説 03「作品と思索の間」 11 月 27 日（土）
話者：
市川秀和（福井工業大学）「増田友也の思惟」
近藤康子（京都橘大学）「初期住宅群」
田中　明（武庫川女子大学）「東山会館，衣笠山の家」
藤原　学（京都大学）「宗教性を建築する―智積院会館と法華クラブ京都店」
西村謙司（日本文理大学）「増田友也の建築論研究」
ナビゲーター：田路貴浩（京都大学／本展実行委員長）

ロビー展示

▶ 大地は語る 2021「Go to Time Travel ～地球から宇宙まで～」
2021 年 11 月 14 日（日）

博物館セミナー

＊ Zoom によるオンライン開催

- 第 114 回　失くしたしっぽは「ひと」を知る鍵
東島沙弥佳（白眉センター）
2021 年 11 月 12 日（金）

- 第 115 回　日本の動物はどこから来てどこへ行くのか？　～島嶼生物学の新展開～
池田悠吾（理学研究科生物科学専攻）
2022 年 2 月 18 日（金）

展示協力（学術標本資料の貸出）

- 国際日本文化研究センター（1 点）特別展 「身体イメージの創造－感染症時代に考える伝承・医療・アート」
（会場：大阪大学総合学術博物館待兼山修学館）
2022 年 1 月 17 日（月）～ 2 月 12 日（土）

入館者数

2,953 名（うち特別観覧　9 団体，142 名）

ロビーに設置されたデジタルサイネージ

入館のご予約についてのお知らせ
2022 年 3 月現在，入館は事前予約制により受け付けております。ご来館の折には当館ホームページにて最新の状況を必ずご確認ください。子ども博物館等イベント開催状況につきましてもホームページに掲載しております。

発行日　2022 年 3 月 30 日
編集・発行　京都大学総合博物館　電話　075-753-3272
〒 606-8501　京都市左京区吉田本町　FAX　075-753-3277
https://www.museum.kyoto-u.ac.jp/